【原著論文】

境界性人格障害のロールシャッハ・テスト
——境界性人格障害指標の作成——

堀口　寿広[1)2)]　佐々木時雄[2)]

抄録：ロールシャッハ・テストとボーダーラインスケール（BSI）を19名の患者に施行した。BSIにおいて25点以上の得点を示すものを境界性人格障害（BPD）の疑いがあるとした場合，ロールシャッハ・テストの11のカテゴリー変数によって，17名（89.47%）の患者が正しく判別された。BPDの特徴として，知覚における刺激の取り込み過剰または不足，現実検討能力の乏しさを表わしていた。これらの重み付けをした変数がロールシャッハ・テストによるBPDのための指標として有用であると考えられた。

精神保健研究　44：69-74，1998

Key words: *borderline personality disorder*, *borderline syndrome index*, *Comprehensive System*, *Rorschach test*

Ⅰ．はじめに

境界例または境界性人格障害は，その衝動性，対人関係や感情の不安定さから社会への不適応を起すことが多く，精神保健の専門家の注目を集めてきた。そして，これまでに多くの研究者が彼らに対してロールシャッハ・テストを用いてきた。GundersonとSinger[9)]は彼らの心理テスト所見の特徴について，WAIS-Rなどの構造化されたテストでは適切に反応できるものの，ロールシャッハ・テストでは，凝りすぎで，けばけばしく，分裂病に比較してより自我親和的であるなどとしている。秋谷ら（順天堂大学心理学グループ）[11)]のまとめたように，同様の結果は日本においても得られている。

このように従来の研究はすべて，境界例，あるいは境界性人格障害と診断された人々のロールシャッハ・テストの結果を基に，他の疾患群の結果と比較をして，その特徴を記述するという手法を取ってきた。

しかし，日常の臨床においては，テスト所見を基にして境界性人格障害であるか否か，という議論が行なわれることが多いはずである。ある障害を持つ人の間で，ある所見が多く見られたという結果だけでは，同じ所見を示す新たな被検査者がその障害を持っているという証拠には，必ずしもならない。じっさい，臨床家がテスト所見を基にして，被検査者が境界性人格障害であるかもしれないと考えるときには，各自，その判断の根拠となるものが存在しているはずである。包括システムにおける精神分裂病指標などの指標は，そのような要求に対する答えの一つであると考えられる。

そこで，本研究では，包括システムによってスコアリングのされた被検査者のデータを用いて，

Rorschach study of borderline personality disorder: Construction of borderline personality disorder index

[1)]国立精神・神経センター精神保健研究所
精神薄弱部
〔〒272-0827　千葉県市川市国府台1-7-3〕
Toshihiro Horiguchi: National Institute of Mental Health, NCNP, 1-7-3, Kohnodai, Ichikawa, Chiba 272-0827
[2)]関東労災病院神経科
Toshihiro Horiguchi, Tokio Sasaki: Department of Psychiatry, Kanto Rosai Hospital

境界性人格障害を特徴づける変数を見つけだし，それを基にして，境界性人格障害の判定を行なう上での指標を作成することとした。この指標を境界性人格障害指標（borderline personality disorder index）と名づけ，この指標に用いる変数を抽出することとした。

II．対象と方法

対象は，東京近郊の総合病院精神科に入院中，あるいは外来通院中の19名である。入院患者14名と外来患者5名，男性16名と女性3名からなる。初診時の主訴では，うつ状態（不安発作を有する者を含む）が10名，摂食障害が6名，他院より精神分裂病と紹介されてきた者が3名であった。彼らの平均（SD）年齢は30.9（±7.2歳）であった。入院患者に関しては，2名を除いて初回入院であったが，全員が入院後一ヶ月以内の受検となった。

テストは主治医の許可によって心理士が施行した。対象者は，主治医からテストの説明を受け同意した後，ロールシャッハ・テストの教示を行なった。初回入院でない二人のみが，これまでにロールシャッハ・テストを受検したことがあった。テストの結果は，包括システムによってスコアリングを行なった。

この時，質問紙としてBSI（Borderline Syndrome Index）日本版に記入をしてもらった。この，BSIは，アメリカのConteら[3]によって考案され，境界例に特徴的な症状を基に，「はい」「いいえ」式の質問が全部で52問ある。既にDSM-IIIにおける境界性人格障害の診断との一致[6]が，DSM-III-Rでの診断との一致[13]がそれぞれ確認されている。また，内的信頼性については，Conteら[3]（$r=0.92$），Dolanら[4]によって（$\alpha=0.97$），また，再検査信頼性についてはFineとSansone[8]によって（$r=.57$）報告されている。各質問に対する「はい」の答えの数を点数と見なした場合，Conteら[3]は25点を，Dolanら[5]は20点を，境界例とするためのカットオフポイントとしている。

このBSIの日本版は，町沢[14]によって作成された。質問はConte[3]のものから2問を除いて50問である（**表1**）が，DSM-III-Rの境界性人格障害を特異的に検出するとされ，カットオフポイントとして25／26点を用いている[14]。

ちなみに，DSM-III-Rと比べDSM-IV[1]では，境界性人格障害の診断基準において，「一過性のストレスに関連した関係念慮または解離性の症状」の項目が新たに附加されており，診断基準による該当者層の変化も考えられる。しかしBSIには質問項目に小精神病的な症状のクラスターに分類されるもの（**表1の2，19，22，28，30，42**）を含んでおり[14]，BSIはDSM-IVでの境界性人格障害の概念にも充分合致しているものと考えられる。

本研究では25点をカットオフとし，この尺度において25点以上の者を境界性人格障害の可能性が高いもの（以下，境界例群とする）として分類した。これによって，境界例群9名と非境界例群10名とした。両群の間に性別および入院・外来別による対象の偏りは見られなかった。質問項目に対する各群の「はい」と答えた人数を**表1**に示したが，ほとんどすべての質問項目において，境界例群のほうが，該当者が多かった。したがって，両群のBSI得点は有意に異なっていた。一方，性別，入院・外来別ではBSI得点に有意差は見られなかった。

解析では，境界例群であるかどうか，を従属変数とした。一方，ロールシャッハ・テストにおいても同様に，ある変数が特定の値を示すときに，解釈上，重要な意味を持つことがある。ここでは，BSIによる判別を予測する独立変数として，「現代ロールシャッハ・テスト体系」[7]に提示されている，包括システムにおいて用いられているカテゴリー変数（**表2**）を取り入れ，それらの変数によって，境界性人格障害であるかという判別が正しく行なうことができるのか，検討した。

計算には，Windows95用の統計パッケージStatView（Ver.4.5）と，PC98シリーズ用のNAP4を用いた。

III．結　　果

解析には，独立変数の各項目に該当するかどうかについて非該当を「1」，該当を「2」とするダ

表1　BSI質問項目と該当者数（人）

	BPD＋(n=9)	BPD－(n=10)
1．私は周囲の人や物事からいつも見放されている気がする	5	
2．私は気が狂うのではないかと恐れている	2	3
3．私は自分を傷つけたくなる時がある	4	5
4．私は他人との親しい個人的関係を持つことを恐れている	5	1
5．最初にあった時はその人はとても立派に見えてもやがてがっかりすることが多い	4	1
6．他人は私に失望している	5	2
7．私は人生に立ち向かう力が無いと感じている	8	5
8．このところずっと幸福だと思うことはない	6	1
9．私の内面は空虚だと思う	6	3
10．自分の人生を自分でコントロールできないと思う	8	4
11．たいてい私は孤独だと思う	7	2
12．私は自分がなろうとした人間と違った人間になってしまった	9	4
13．私は何でも新しいことが怖い	7	1
14．私は記憶力に問題がある	5	4
15．何かを決心することは私には難しい	9	3
16．私の周りには何か壁があるように思う	6	5
17．いったい私は誰なのかと困ってしまう	5	4
18．将来に不安がある	9	8
19．時に私はバラバラになるように感じる	4	2
20．私は人前で気を失うのではないかと心配している	3	1
21．私はできるだけ努力しても決してうまくはできない	5	3
22．私は自分が何かを演じているかのように自分を見ている	3	2
23．私はいないほうがむしろ家族はうまくやっていくだろう	5	2
24．私は至るところで失敗している人間だと思い始めている	7	4
25．この先何をしたいのか私にはわからない	8	5
26．人間関係の中に入ると私は自由ではなくなってしまうように感じる	8	5
27．誰も私を好きにならない	4	
28．実際起こったことと想像したことの区別がよくわからない	1	
29．他人は私を「物」のように扱う	1	
30．何か変な考えが頭に浮かぶと私はそれをとりのけることができない	6	4
31．人生に希望はないと思う	6	
32．私は自分自身を尊敬することができない	7	5
33．私はまるで霧の中に生きているようにはっきりしない	4	4
34．私は人生の失敗者だ	6	
35．誰か他人の責任を負うことは怖いことだ	8	4
36．自分が他人に必要とされている人間とは感じない	5	
37．私は真の友人を持っていない	6	2
38．私は自分の人生を生きることができないと思っている	7	
39．買い物や映画を見に行く時のような人ごみの中にいると不安になる	5	2
40．私は友人を作ることが下手である	7	4
41．私はもはや人に認められる立派な人になろうとするには遅すぎる	6	1
42．周りの人は勝手に自分の心を読んでいるのではないかと思う	3	3
43．私の周りで何かが起こりそうだと感じる	2	
44．私は残酷な考えが浮かんで苦しむことがある	4	2
45．私は自分が男性（女性）であることに自信を持っていない	5	2
46．私は長く友人づきあいができない	6	1
47．私は自分を憎んでいる	4	1
48．私は広い場所や市街に出ることを恐れている	1	1
49．私はときに「自分は生きている」のだと自分に言い聞かせている	4	3
50．ときに私は自分自身でないと思う	5	1
Mean (SD)	30.11 (4.99)	12.00 (8.23)

p＝0.0002 (Mann-Whitney's U-test)

表2　解析に使用した変数

〈体験型〉
1．M-WsumC≧2（内向型）
2．M-WsumC＝＋1.5～－1.5（両向型か両貧型）
3．M-WsumC≦2（外拡型）
〈体験型の差（EA-es）〉
4．Dscore＜0
5．AdjD＜0
〈Zスコア〉
6．Zd＞＋3.0
7．Zd＜－3.0
〈形態水準〉
8．X＋%＜0.70
9．F＋%＜0.70
10．X－%＞0.15
〈特殊指標〉
11．S－Con≧8
12．SCZI＝5
13．SCZI＝4
14．DEPI＝5
15．DEPI＝4
〈その他〉
16．FM＋m＜Sum Shading
17．a＜p
18．M^a＜M^p
19．3r＋(2)/R＜0.30
20．Afr.＜0.55
21．Lambda≧1.5
22．Pure H＜2
23．Isolate＞0.25

表3　数量化2類による解析の結果

No.変数（アイテム）	偏相関係数	レンジ	カテゴリースコア（上段：該当）（下段：非該当）
6．Zd＞＋3.0	0.481	3.530	3.344
			－0.186
9．F＋%＜0.70	0.454	2.097	0.221
			－1.876
7．Zd＜－3.0	0.417	1.528	0.724
			－0.804
21．Lambda≧1.5	0.418	1.336	0.914
			－0.422
10．X－%＞0.15	0.249	1.369	0.072
			－1.297
16．FM＋m＜Sum Shading	0.303	1.159	－0.854
			0.305
2．M-Wsum C=+1.5～－1.5	0.297	1.095	－0.807
			0.288
22．Pure H＜2	0.317	0.882	0.464
			－0.418
11．S-Con≧8	0.105	0.685	－0.649
			0.036
20．Afr.＜0.55	0.219	0.599	0.189
			－0.410
18．M^a＜M^p	0.125	0.469	0.296
			－0.173

ミー変数を用い，数量化2類を行なった。マルチコ（多重共線性）を避けるため，変数の間で疑似相関をとって，有意に高い場合はその片方の変数（**表2**の1，3，4，8，12，13，14，15，17，23）を除外して，解析を行なった。しかし，この最初の解析においては，各カテゴリーにおける偏相関係数の大きさの順位とレンジの大きさの順位とが大きく食い違っていたため，双方の値が最も小さかった2変数（**表2**の5，19）をさらに除外して，解析し直した。

結果は**表3**の通りである。このうち，下線で示した変数（アイテム）については，それに該当しない時にBSI得点25点以上と関連していた。したがって，これらの変数のみは不等号の向きを逆にして考えることとなる。

偏相関係数およびレンジからは，解析に使用された変数のうちでも，組織化活動を表わすZスコア（Zd）の極端な値，純粋良形態反応率（F＋%）の低さやラムダ（Lambda）の高さが，より大きく寄与していることがわかった。

これらの変数に与えられた数値を用いて，今回の19名のサンプルスコアを求め，判別を行なったところ，それぞれ各群の1名づつを除いて，17名が正しく判別された。したがって，これらの変数による判別的中率は89.47%であった。また，分析の精度を知るもう一つの目安である相関比はη^2＝0.80であった。分析の精度が高く，他の集団においても，これらの変数による判別が正しく行なわれ得ることが示された。

IV．考　　察

解析の結果は，BSIにおいて25点以上の得点を示すかどうか，すなわち，境界性人格障害とされ得るかどうかの判別に，次の諸特徴が有効であることを示唆している。

境界性人格障害とされる被検査者は，まず，極

端なZdの値に表わされるように，外界に対して強迫的であるか，場当たり的に接しているようである。このうち，低いZスコア（Zd＜－3）は，ハイラムダ（Lambda≧1.5）に見られるような，外界の刺激を単純化してとらえようとする傾向と通じるものである。質問段階での反応の説明は不充分で，「形だけでそう見えた」と述べ，他の反応決定因の関与が見られないことが多い。しかも，純粋良形態水準率（F＋%）の低さ，不良形態水準率（X－%）の高さは，その認知のスタイルが，現実に適応したものではないことを示している。

一方，彼らの反応には，現実の人間の全身像が少ない傾向が示された。境界性人格障害の対人関係については，DSM-IVにおいても，その激しく入れ替わるパターンが指摘されている。彼らの場合，分裂病に比して，現実的な人間像があまり見られず，例えば「悪魔」のように非現実的であったり，「死んだ」など破壊された人間の反応が多いことが既に知られている[12]。

また，「向かい合っている」に代表されるような消極的な運動がより多く述べられる傾向もみられた。自己像の歪みがあり，協調性に乏しく，現実の人間関係に適応が難しく，場合によっては被害的にとらえる可能性がある。したがって，対人関係における葛藤に対しては，その対処が困難であることがうかがわれる。

たとえば今回扱った事例ではないが，境界性人格障害の事例[10]では，反応の説明段階において，当初は「少女」であった第Ⅶ図版が「老婆」になり，最終的には「心の病んだ老婆」と変化してゆくものなどがある。スコアリングのみではこのような変化を動的に記述することは困難である。Lernerら[12]は境界例に特徴的なものとしてこの記述を試みたのであるが，精神分裂病などの患者と比較して差が無かったとする結果[2]も報告されている。人間に関する反応の内容および説明の仕方については，更に詳細に検討する必要があろう。

以上，本研究では，ロールシャッハ・テストによる境界性人格障害の理解において，従来の視点とは逆に，変数の解釈からでも彼らの特徴をとらえられる可能性を示した。

そして彼らの反応を特徴づけている変数を基にした解析により，偏った認知のスタイルや，現実検討能力の低さ，といった特徴が，境界性人格障害の特徴を予測する指標となりうることを明らかにした。今回の判別の精度は高く，この指標を一般化しての理解が妥当であることを示唆している。

しかしながら，今回は対象者が少なかったため，今後は対象者を増やして，改めて検討する必要があろう。使用した変数についても，さらに他の変数を加える必要があるかもしれない。疑似相関をとる過程で，重要な変数を落としてしまった可能性は否定できない。

したがって，今後は，各変数の重み付けを簡略化するなどしてあらためて判別を行ない，境界性人格障害指標としてのより確かな把握を目指したい。

文　献

1) American Psychiatric Association: Diagnostic and statistical manual of mental disorders (4th ed.). Author, Washington, DC, 1994.
2) Burla, F, Ferracuti, S, Lazzari, R: Borderline personality disorder: Content and formal analysis of the Rorschach. Rorschachiana 22: 149-162, 1997.
3) Conte, H, Plutchik, R, Karasu, T et al.: A self-report borderline scale: Discriminative validity and preliminary norms. J Nerv Ment Dis 168: 428-435, 1980.
4) Dolan, B M, Evans, C, Norton, K: The separation-individuation inventory: Association with borderline phenomena. J Nerv Ment Dis 180: 529-533, 1992.
5) Dolan, B M, Warren, F, Norton, K: Change in borderline symptoms one year after therapeutic community treatment for severe personality disorder. Br J Psychiatry 171: 274-279, 1997.
6) Edell, W: The borderline syndrome index: Clinical validity and utility. J Nerv Ment Dis 172: 254-263, 1984.
7) Exner, J E: The Rorschach: a Comprehensive System Volume 1. Wiley and Sons, New York, 1986.（高橋雅春，高橋依子，田中富士夫監訳：現代ロールシャッハ・テスト体系（上，下）.金剛出版，東京，1991.）
8) Fine, M A, Sansone, R: Three-year test

-retest reliability of the Borderline Syndrome Index among women with eating disorders. Psychological Reports 67: 1089-1090, 1990.
9) Gunderson, J G, Singer, M T: Defining borderline patient: An overview. Am J Psychiatry 132: 1-10, 1975.
10) 堀口寿広：ロールシャッハ・テストにおける男性性について．日本ロールシャッハ学会第1回大会，金沢，1997.
11) 順天堂大学心理学グループ：境界例のロールシャッハ・テスト研究．ロールシャッハ研究 25：107—120，1983.
12) Lerner, H D, Sugerman, A, Gaughran, J: Borderline and schizophrenic patients: A comparative study of defensive structure. J Nerv Ment Dis 169: 705-711, 1981.
13) Lewis, S J, Harder, D W: A comparison of four measures to diagnose DSM-III-R borderline personality disorder in outpatients. J Nerv Ment Dis 179: 329-337, 1991.
14) 町沢静夫：ボーダーライン・スケールの日本人への適用—日本における境界型人格障害の診断妥当性の検討．精神科治療学 4：889-899，1989.

Abstract

We administered the Rorschach test and Japanese version of borderline syndrome index (BSI) to 19 patients. Their mean (SD) age was 29.74 (7.36). Provided 25 or more score on BSI were suspected as having borderline personality disorder (BPD), 11 of the categorical variables of the Rorschach distinguished 17 of 19 patients (89.47%) correctly. The variables explained over or under-incorporate style of perception, poor reality testing, interpersonal problem among BPD. These weighted variables would be valid for indices of the Rorschach of BPD.